

## 會津八一の挽歌「山鳩」「観音堂」考

北 嶋 藤 郷

はじめに

おおらかに大和を謳いあげた會津八一（秋艸道人）は、万葉一良寛一子規一八雲一八一という系譜意識をあらわにして、孤高の態度を持した歌び人として知られる。彼は「歌は読むべきものではなく、耳で聞くべきものである」として、声調（音韻律）をもっとも大切にした。

歌人、書家、東洋美術史家としての栄光が、八一の語学的才能を覆い隠しはしたが、彼の英文学への関心は生涯枯渇することなく、彼の幅広い文芸活動の中に拡散していった。言い換えれば、彼の学者、文人、歌人としての全業績を育て上げたのは、英学が基礎となり、英学を通してえた古代ギリシアについての該博な知識などを自家菜籠中の物としたのであった。ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の影響を受けた卒業論文は「キーツ研究」であり、学匠・會津八一の原点であると考えている。この卒業論文は、恩師・坪内逍遙に提出したことは知られているが、残念ながら現在は保存はされていない。

八一はテニソンの「歌人のうた」やロングフェローの「<sup>きさらぎ</sup>二月の夕<sup>ゆふべ</sup>」の英詩の和訳、そしてドーデー作『教室の名残』の解題と全訳を残している。

八一が編集した英語教科書は、筆者の調べたかぎりでは、①*A New Dictation Book*, ②*New English Prose*, ③*Voyage of Life and Other Pieces on Life from Various Authors*, ④*Readings from Various Authors* の4種類。

もともと八一は英文学者でもあり、特にイギリス・ロマン派の詩人たちへの造詣が深い。自然回帰と孤独のなかでの瞑想を特徴とするワーズワスに「ルーシイ詩篇」(‘Lucy Poems’)という詩篇がある。素朴な山里の少女の面影を美化し、甘美に讃えた詩である。ルーシイ・グレイは、苔むす石の傍らで、人目につかず咲く花菫のような乙女で、ひそやかに暮らして、人知れず世を去った。「乙女は永久に眠りけり、あわれわが身のはかなさよ」と詩人はうたう。その翌年、彼は思い出のグラスミア湖のほとりに「山鳩山荘」(Dove Cottage)を構えてそこに住みついたが、この謎のようなヒロインと詩人自身の私的な事実関係は詳らかではない。詩中のモデル

につてはあれこれと取りざたされてもいるが、そういったゴシップめいた詮索は、この詩の本質とは関わりはない。が、この詩が時代の社会的現実と深く関わっていたことは確かである。

また、ハ一は早稲田大学で、アメリカの詩人E. A. ボウを講じた記録もあることからして、ボウの詩「アナベル・リー」(‘Annabel Lee’)も彼は熟知していたであろう。ボウは、彼の従姉妹で当時13歳だったヴァージニア・クレムを妻としたが、極貧の中、結核で若死にさせている。この詩自体が薄倅な亡妻への挽歌ともいえよう。

さなり、さればとよ (わたつみの

みさきのさとにひとぞしる)

油雲風を孕みアナベル・リー

さうけ立ちつ身まかりつ

(And this was the reason that, long ago, / In this kingdom by  
the sea,

A wind blew out of a cloud, chilling / My beautiful Annabel  
Lee;)

先年、わがノーベル賞作家・大江健三郎は、『薦たしアナベル・リー 総毛立ちつ身まかりつ』という作品を上梓した。この古めかしいタイトルは、日夏耿之介の格調高い訳業から採択したものである。作家は「生涯で最も感動した詩と、ずっと心に抱えていてきた理想の女性像を書いてみたかった」と創作動機を語っている。

近藤富枝によれば、「(観音堂におけるきい子は)すでに蚕が上簇するときのような皮膚となっていて、神々しいまでの美しさであった」(「やまばとの声」)という。

「薦たしアナベル・リー 総毛立ちつ身まかりつ」の詩句にみるアナベルときい子の死、極寒のボウの小屋と極暑の観音堂を重ね合わせても、どうもうまく像を結ばないが、挽歌「山鳩」でハ一は、英米の最も感動した詩と、心に抱えていてきた理想の女性像をうたいあげたかったのではないか。私見ではあるが、ハ一にとって、「山鳩」のヒロインである薄倅の佳人・きい子は、ルーシイ・グレイやアナベル・リーのイメージと通底するところがあるのではないかとみている。

本稿の眼目は、「秋艸堂学規」の紹介をした後、「山鳩」と「観音堂」

の一連の短歌成立に関する解説・評釈を試みたものである。八一ときい子が翻弄された戦禍という時代背景をも織り込んで拙筆を運んだものである。

- 「山鳩」の序文は、雑誌『象徴』を参照して、段落を設け、ルビを多くふった。また、その後に現代語訳も付した。
- 「山鳩」「観音堂」の原文は、総ひらがな書き・語分かち・歴史的かな遣いであるが、その下に、漢字かな交じり文・現代かな遣いに改めたものも示した。
- （注）として、語釈を添えて歌解の便をはかった。
- （大意）として歌の大意を示した。さらに解説を適宜加えた。
- 「山鳩」「観音堂」の一連の歌作には、便宜上アラビア数字を振った。
- 最後に、「山鳩」と「観音堂」の英訳を付した。グローバル時代にあって、會津八一が世界に出て行く時機が熟しているように考えるからである。

#### 秋艸堂学規

- 1. ふかくこの生を愛すべし
- 1. かへりみて己を知るべし
- 1. 学藝を以て性を養ふべし
- 1. 日々新面目あるべし

大正3年、會津八一は牛込下戸塚町の素人下宿から、小石川豊川町に引越し、越後から出て来たばかりの三人の書生と共に一家を構えた。その時、自筆で書いて、書生たちの部屋の壁に貼らせたのがこの「学規」である。書生たちに、生きていく上の指針を示したものである。当時連載していた「落日菴消息」（『新潟新聞』）の中で、八一は「学規は吾率先して躬行し、範を諸生に示さんことを期す。主張この内にあり、同情この内にあり、反抗また此内にあり」と書いている。

八一はこの「学規」について、恩師坪内逍遙博士の評言を求めた。逍遙は、「御塾則道学めかざる所最も妙、その悠然、その綽然、諸生を悦服せしむべく候」と答えた。

植田重雄は、「この学規には、人間性を重んじ高めようとする道人の理想がうたわれている。人目につく、はなやかなことを言わず、主義をかざさず、理に堕ちず、ゆっくりと種をまき、水をそそいで、自らを養い、また若い子弟を育てようとする無限のあたたかさがある。まず道人が、自ら

に課した戒めでもある」（『秋艸道人・會津八一の生涯』）と述べている。

当時の會津八一は34歳、早稻田中学校の教師であり、早稻田大学英文科講師を兼任していた。週29時間に及ぶ授業に忙殺されていたが、今井安太郎宛の書簡の中で自分を戯画化して、次のようにいっている。

「学究八朔、教員八朔、俳人八朔、酔客八朔、親分八朔、游人八朔、任侠八朔、病人八朔、悪党八朔、趣味八朔。かくの如くいろいろに暮らし居り候」（八朔・八朔郎は八一の俳号）

戯画化したこの書簡にみる限りでは、恩師逍遙のいうように道学めいたものになるはずもなく、人生を肯定的に明るく展望して、学問も芸術も人生のためにあるべきだ、と主張している。興味深いのは、俳人としての八一が全面に押し出してきていて、歌人八朔や書人八朔が背後に隠れており、まだ表面に出てきてはいない、ということである。歌人、書家としてはまだ世に出ていない時期である。趣味八朔の中には、池大雅・与謝蕪村筆「十便十宜図」にならった俳画八朔（蕪村のいわゆる「匂いづけ」というより、「べたづけ」の手法）や園芸八朔や小鳥飼八朔も含まれていよう。八一の『渾齋随筆』（1940）には、「小鳥飼」がある。

八一は教師として、不思議なカリスマ性をもっていた。容貌魁偉であったのみならず、その教育方法もきわめてユニークであった。蓬髪にダブダブの洋服、見かけは乱暴で、悪党ぶってはいるけれども、情熱的でひどく優しい一面も備えていた。彼は六尺豊かな巨体にもかかわらず、実は健康面での不安も抱えてもいて、実に多彩な特質をもつ人物であった。

### 挽歌「山鳩」にうたわれたヒロイン（heroine）

會津八一の挽歌「山鳩」は、よく斎藤茂吉の「死にたまふ母」と比較される。茂吉の挽歌は、〈くれなゐの茂吉〉と呼ばれるように、色彩も音調も鮮やかな詠風である。茂吉は31歳の若き日にこれを歌ったが、八一は戦禍で秋艸堂を焼かれ、郷里の知己に身を寄せる65歳の老残の日々にこれをうたった。八一の詠出した一連の挽歌は、色はくすんで音は沈み、「国破れて山河あり」の思いも重ねた彼の名筆「山河慟哭」とともに、日本帝国の崩壊への怒りと抗議をも裡に含んだ大きなスケールで、美しい悲傷の曲を奏で、人々の胸を撃つ。

夏になると、自筆「山鳩」（影印本）を書棚から出して、八一の筆跡をたどってみる。この挽歌にうたい込まれている女性は、高橋きい子（昭和19年、八一の養女となる）。今から63年前、終戦の年の7月3日、彼女は寄留先の胎内市（中条）の豪農・丹呉邸から同家の観音堂に仮寓し、一週



間後に33歳という若さで絶命した。その日の周囲の森には、山鳩や郭公の声が響きわたっていたという。

高橋きい子は、明治45年3月31日、父・喜蔵、母・ミナの五女として、新潟市沼垂町で生まれた。キミ、イト、キセ、キヨ、キイの5人姉妹。父親は手広く米穀商を営み、土地や株などを所有して産をなした。それに新潟電灯株式会社（東北電力の前身）の設立にも参画し、専務取締役となった。彼は資産家、名望家として近隣に知られた。母親のミナは蒲柳の質で、きい子が生まれてまもなく結核で入院。感染を恐れて近づくことも許さず、きい子は、母に甘えることも知らずに育った。大正3年、彼女が2歳の時に母は死亡。数年後には、父親の喜蔵も後を追うように他界した。きい子は、大正13年3月、万代尋常小学校を首席で卒業。品行は「機敏で熱心」と記録されている。昭和3年3月、県立新潟高女を優秀な成績で通して卒業した。当時の高女の校訓は、「清く正しく麗しく」であった。高女時代のきい子の制服姿のポートレートが残されている。やや右斜め向きの姿勢で、その先の一点を凝視している。黒髪は豊かでほりの深い顔立ち、黒目がちの大きな眼が印象的だ。まるで落谷虹児の描く美人画のように、叙情的で憂いを含んだおもろさである。

八一の実弟の戒三は、新潟交通の創始者の中野四郎太の取り持ちで、高橋家の長女キミと結婚して、婿養子に入る。きい子は戒三の妻の妹で、八一の義妹にあたる。縁辺とはいえ、八一となんの血のつながらないきい子。名家に生まれながらも肉親の縁に薄く、やがて生家の没落、そして経済的にも余裕のない状態にあった時、早稲田大学教授として名を馳せている八一の秋艸堂へ家事手伝いに来てほしい、という話が彼女に持ちあがった。現状を打破するには、これを受諾する以外に方途はない、ときい子は心を固めたのかもしれない。

### 落合秋艸堂時代

大正11年8月23日、會津八一は、東京市外の下落合に居を移した。早稲田大学の初代図書館長で文人の市島春城の別荘だけあって、500坪以上の広大な庭は、鬱蒼たる老樹に囲まれ、清泉が湧き、窓前草木深く、山鳩や野鳥が遊びにくるような環境であり、まさに八一の理想の住居であった。

学業に精励する八一は、生涯独身でその生を終えたが、八一の身边には、ひたすら献身的に奉仕した女性はいた。それはいわゆる下婢の類ではなく、八一を見守り、敬慕の念をもって、その生活を支えた女姓たちである。

高橋きい子が堂守として、この落合秋艸堂に入ったのは、いつであったか。「山鳩」の777字に及ぶ長い序文の「きい子もと高橋氏、二十歳にして予が家に來り、養うて子となす。よく酸寒なる書生生活に堪え、薪水のことに當ること十四年、内助の功多かりしは、その間予が門に出入りせしものの、齊しく睹るところなるべし」に従い、きい子の死から起算して、14年前、20歳の時を計れば、昭和6年ということになる、という研究家もいる。しかし、八一ときい子が戒三に宛てた書簡などからして、上京は昭和8年3月の末であったことは、今では動かない事実である。このとききい子は21歳。戒三宛の手紙で、秋艸堂の生活は、「甚だ失礼ながら下女の如きものにて、何の楽しみもなく寂寞に苦しまるゝことと存じ候」と書き、令妹・きい子に覚悟して来てくれ、と八一は念を押している。

八一は、感情の揺れが激しい、癪癪もちで気難しい、エキセントリックな学匠であったが、経済的な基盤を失い、帰る実家もなかったからこそきい子は、最初は慣れない仕事に戸惑いながらも、悲しみを胸にたたみこみ、心労を惜しまず家事万端に尽くし、まわりの人々が驚くほどの忍耐力を示した。彼女はしだいに八一の学問や芸術を理解し、彼を心から敬愛するようになった。きい子のひたむきな奉仕のなかで、八一の重要な仕事が次々と結実した。家事手伝いの処遇で呼ばれた彼女は、やがて八一の適切な伝授を得て、來客の応接、原稿の浄書、校正等々を見事にこなし、八一の生活のよきパートナーとなった。

八一の30年来の隣人であり、きい子の親しい友人であった料治 花のエッセイには、「高橋きい子、この人こそ私は会津八一のベアトリーチェだ」と思う。きい子さんと暮らした14年間は、おもえば先生の芸術の完成期ではなかったか、文学博士となり、その著は版を重ね、書は愛好家の手に入りにくく、声価とみに上ったのもこの時代であった」と彼女の評価はきわめて高い。

花の夫・熊太は、秋艸堂諸事雑用引受け執事と自ら称し、庭の手入れや屋根の雨漏りの修理など、日常の八一をよく助けた。彼は、きい子を「氣品があり、それにもまして心の美しい人」と述べ、さらに「色白く、眼の涼しい、声のキレイな人だった。この人が、森の中の秋艸堂に現れてからは、ここに集まる青年たちは、なんとなく、心に張りが出て來たかのように、私にはみえた」と表現している。（『會津八一の墨戯』）

### 滋樹園秋艸堂時代

八一はおおよそ13年間の落合秋艸堂時代を経て、昭和10年5月、通称目

白文化村に居を移した。春城から無償で借りた村荘の広い庭には、佐渡の順徳院の行宮址から持ってきたという山菊をはじめ、そこに植えられた草花までも根を掘り起こして引っ越した。植物だけではなく、飼っていた数珠掛鳩、長嘯鳩、メキシコ・インコなどを引き連れての大移動で、漱石にならっての同門生の研究会「木曜会」に秋艸堂に出入りする書生たちも動員された。その中に、「まるでノアの方舟のようだ」という門下もいた。八一に仕えて、生涯を捧げ尽くしたきい子は、この転居でも中心となり、機敏で熱心な働きをしたことであろう。

八一は容貌魁偉、身長は180センチ近くあり、明治生まれの日本人男性としては、ひときわ大柄で立派な体格を誇っていた。しかし健康面ではどうであったかとなると、難病の糖尿病をはじめ、始終病気の不安を抱え、病魔に苦しめられる日々が続いた。「山鳩」の序文に「幾度か予の重患に侍し、遂に疲勞を以って病因をなしたるが如し」とあるように、八一の病気の看病がきい子の病因となったことを打ち明けている。きい子は華奢な体形で、身長155センチほどであったが、不眠不休で八一の看護に尽くした。16年の夏、今度はきい子が倒れ、病臥中に咯血。病んでひとしお儚げな美しさであったという。

目白文化村へ転住から10年後の昭和20年4月、東京大空襲で罹災し、八一は洋傘一本を杖代わりに、病弱のきい子の手をとりながら、焼け落ちる秋艸堂の炎に追われるようにし、辛うじて越後へ逃げ延びたのである。深い林につつまれた広大な屋敷に、茅葺の大屋根をいただいた丹呉邸は、豪壮であった。ここできい子は、逆境からの再出発を期したが、宿病となった結核は、すでに開放性へとすすんでいた。ここに寄寓した時点から、観音堂で落命する3日前までの「生活日誌」がきい子の絶筆となった。秀麗で乱れない文字で、生活環境や病状の変化、身辺諸事に関する所感が簡明につづられている。精読してみて、死を目前にして、なお冷静な彼女の知性と品位と情感に胸を衝かれた。

「山鳩」の一連の歌は21首。その構成は、「瀕死」「死者を対者とするモノローグ」「詠嘆」などである。山鳩の歌は4首歌いこまれているが、2首目は、きい子の「死」、3首目は「死後」を取り扱い、さらに18首、19首は「死霊慰撫」の歌といえよう。あとで「山鳩」の21首の歌解をするが、ここでは山鳩を扱った第2首、3首、18首、19首、そして終尾を飾る詠嘆の歌、第21首を紹介する。

〈山鳩の響もす宿の静もりに <sup>なれ</sup>汝 はも逝くか眠るごとくに〉

<相知れる人なき郷に病み臥して 幾日聞きけん山鳩の声>  
 <山鳩は来鳴き響もすひねもすを 聞きて眠れる人もあらなくに>  
 <光無きとこ世の野辺の果てにして なおか聞くらん山鳩の声>  
 <悲しみて出づれば軒の繁り葉に たまたま赤き石榴の花>

きい子死去の際、八一はその枕頭で万斛の涙を注ぎ、般若心経を筆写した。その後も八一は観音堂に籠り、心を研ぎ出し、天地を貫く深い悲しみに溢れて詠出した絶唱「山鳩」は、きい子への深謝の念と追慕の情、その歌調の美しさと相まって、きわめて秀逸な詩的世界を構築している。八一文学の頂点をなすこの一連を誰よりも天にあるきい子が喜んだのではなからうか。

秋艸堂諸事雑用引受け執事・料治熊太は、小笠原 忠『鳩—教育者会津八一の人間像—』という作品の解説、『鳩』について思うことの中で、「『南京新唱』には、諸仏の歌が数々うたわれているが、仏へ手向ける思慕の中に、肌へ向かって肌で感じる何かがあるのを、見のがしがたい。やわはだであり、おとがいであり、しろきひたいであり、うつらまなこであり、まろきひざである。みほとけは、すべて、うつし世の人の姿で描かれている。

(略) 歌韻のひびきに、憧憬、思慕の情切々たるを感じさせる。物言わぬ仏に、生けるものの感情を示している。歌韻の底にひそむものは、生けるものが、生ける者へ寄せる響き以外の何ものでもない。(略) 先生は奈良や京都の歌を多く作られたが、この艶々しいまでに切々たる高らかな嘆きをもって迫ってくる歌は、この『南京新唱』あるばかりである。後にあげれば『山鳩』の一連の挽歌があるといえば、それがあるだけである」と述べている。

八一は終生独身を決意し、76年の独身の生涯を終わったが、孤独の道を選んだのは、それ相当の理由があったようだ。大学時代から有恒学舎(現新潟県立有恒高校)の教師時代、つまり26歳から28歳ごろまで、八一にも燃え立つような青春の日々があった、といわれている。その時期もそう長くは続かなかった。明治40年という年は、愛情の対象であった閨秀画家が他の人と結ばれた年である。同年8月、八一は初めて奈良に遊んだ。考えること、悩むことで人一倍強烈であった、八一には、滝口入道が悩んだと同じような悩みがあったのである。明治41年の彼の句に、次の一句があることを紹介しておきたい。

ふとこにあつきぶしや秋の風 (八朔郎)

## 「山鳩」序

きい子もと高橋氏、二十歳にして予が家に來り、養うて子となす。よく酸寒なる書生生活に堪へ、薪水のことに當ること十四年、内助の功多かりしは、その間予が門に出入せしものの齊しく睹るところなるべし。もとより蒲柳の質なりしを、幾度か予の重患に侍し、遂に疲勞を以て病因をなしたるが如し。今春臥して病褥に在るに當り、一夜たちまち戦火を被り、わづかに身一つを以て免れ、予とともに越後に歸り、西條村の丹吳家に寄りしが、幾何もなくして病勢大に進みしかば、予はその邸を辭し、伴ひて村端なる觀音堂といふに移れり。こは丹吳の祖先某々が剃髮して餘生を送られしところにして、今なほ數奇の遺構を偲ぶべきあるも、その後數代の荒廢を重ね、今は窓前草木深く鎖して、鬱々たる四隣の綠陰には、ここかしこ蒼白き墓石さへ數ふべく、いとわびしきさまなれども、閉靜にして人事に遠きをめづべしとて來りしなり。

もとよりかかる世のさまとて頼むべき人手も無く、藥餌にも乏しきを、看護に炊事に、予みづから迂拙の力を瘁したるも、七月十日といふに、ここにして白晝遂に永き眠に入れり。

きい子は平生學藝を尚び、非理と不潔とを好まず。絶命に臨みてなほ心境の明清を失はざりしに、時恰も交通のたよりあしく、知る人の來りて枕頭を訪ふもの殆ど無かりしかば、予ひとり側にありて、衷心の寂寞を想うて、しきりに流涕をとどめかねたり。

やがて隣人に援けられて野外に送り、茶毘に附し、翌朝ひとり行きて骨を拾うて歸り來りしも、村寺の僧は軍役に徴せられて内に在らざるを以て、難尼を近里より請じ來るに、その年ようやく十餘歳、わづかに經本をたどりて修證義の一章を読み得て去れり。

乃ちみづから戒名を撰み、授けて素月冷光信女といふ。予が家の墓所は新潟市西堀なる瑞光寺にあるも、市は今空襲を虞れて騒然たりといへば、他日の平靜を待ち、携へ去りてその壙中に納めむことを期す。されど予すでに老いたるに、戦局の歸趨また知るべからず。今はただこれを記して、この一聯の序に充つるのみ。

昭和二十年八月十日

## 「山鳩」序文（現代語訳）

きい子はもとの姓は高橋であるが、二十歳でわが家に来て、のちに養女とした。つらく貧しい研究生活にもよく耐え、家事を取りしきって十四年、内助の功が多かったのは、その間、わが家に出入りした人たちが皆よく見ていることであろう。もともと体質が弱かったのに、何度もわたしの重い病気の看護をして、ついに疲労がたまったのが病気の要因となってしまったようだ。今年の春、きい子が病床に臥せていると、ある夜、急に戦火に遭い、身一つで辛うじて逃れ、わたしと共に新潟県に帰り、西条村の丹呉家に身を寄せた。ほどなくして、きい子の病状がひどく悪化したので、わたしは丹呉邸を去って、一緒に村はずれの観音堂というところに移り住んだ。この寺は、丹呉家の祖先のある人が仏門に入って髪を剃り、余生を過ごされたところである。この堂の古い建物には、今でもまだ風雅な趣は残り、往時を偲ぶことはできるものの、その後、数代の時空を経て荒廃が進み、現在は窓の前方は草木に深く蔽われていて、人を寄せ付けず、周囲の鬱蒼とした木陰には、青白い墓石までも数えることができる。たいへん佳しい光景ではあるが、ひっそりとして人間関係の煩わしさがいないことが気に入って、居を移したのだ。

いうまでもなく、このような戦時下の世相なので、頼りとする人もなく、薬や食べ物もなかなか入手することはできない。看護や炊事にわたし自身の拙い力をふりしぼってきたのだが、七月十日という日、きい子はこの観音堂でとうとう永眠した。

きい子は、普段から学芸を重んじ、道理にはずれたことや汚いことを嫌い、瀕死の状態にあっても、まだ心持ちは明るく清らかであった。ちょうど交通の便もわるい（戦乱の）時勢で、親戚、知人がやって来て病床を見舞うこともほとんどなかった。わたしはひとり傍にいて、心の底から寂しく思い、涙が溢れてきて止まらなかった。

しばらくして隣人に助けられて野辺の送りをし、火葬に付し、翌朝ひとりで骨を拾って帰って来た。村の寺の僧侶は、兵隊にとられて不在であるので、近くの村から若い尼僧を頼んで来てもらった。年齢はほんの十歳余であろうか。尼僧は経本の中から修證義をやっと探し出して、その一章を讀経して帰っていった。

そこで、わたしは素月冷光信女という戒名を撰んで、きい子に授けた。わが家の墓所は、新潟市西堀の瑞光寺にあるのだが、市内は今空襲を恐れて騒々しいという。後日、平静さが戻るのを待って、遺骨を納めに行きた

いと思っているが、わたしもすっかり老いてしまい、加えて戦局の行方も知ることができない。今はただこれを記して、一連の挽歌の序文にあてるだけである。

昭和二十年八月十日

〔註1〕

「山鳩」の原文「序」と短歌21首に関しては、『會津八一全集』（第四巻）pp. 255－261を参照。

また、雑誌『象徴』（編集人・結城信一：昭和21年10月号）を参照。

結城信一は會津八一門下で、『石榴抄—小説秋艸道人断章』（新潮社、1981）などがある。

〔註2〕

「山鳩」序文の現代語訳と「山鳩」21首と「観音堂」10首の評釈に関しては、平成12年10月7日、喜多 上氏の講演、「中条 逆境からの出発」の資料参照。會津八一記念館編『逆境からの再出発—中条時代の會津八一』（2002）を参照。

〔註3〕

「観音堂」の原文10首に関しては、『會津八一全集』（第四巻）pp. 262－266を参照。

〔註4〕

「山鳩」と「観音堂」の構成

- ①「山鳩」「観音堂」の原文表記は、総ひらがな書き・語分かち・歴史的かな遣いであるが、その下に、漢字かな交じり文・現代かな遣いに改めたものも示し、読解の便をはかった。
- ②（注）として語釈を添えて、読解の便をはかった。
- ③（大意）として歌の大意を示し、さらに解説を適宜加えた。
- ④読解に必要なと思われる参考資料などを適宜掲げて、諸家の解説をも挿入しながら、歌に含まれる意味も示すように心がけた。
- ⑤「山鳩」「観音堂」の一連の歌には、便宜上アラビア数字を振った。

## 「山鳩」

- 1 いとのきて けさ を くるし と かすか なる その ひとこと  
の せむ すべ ぞ なき

いとのかきて今朝を苦しとかすかなるその一言のせんすべぞなき

(注) ○いとのきて—とりわけ、特別に。自注には、「いよいよ甚だしくなるの意」。○けさを—「を」は強調。「は」に同じ。○せむすべぞなき—なすすべもない。

(大意) 「今朝はとても苦しい」ときい子のかすかな声で訴えるのだが、その一言に対して、わたしはどうしたらいいのか、おまえにしてやれることは何もない。」

「山鳩」は、きい子の死を追悼する一連(短歌シークエンス)21首。このうち巻頭の6首は、7月10日、観音堂にて、絶命したきい子を扱っている。

この日の八一日記には、「未明にキイ子危篤に陥る。恰も空襲警報中」とあることから、きい子が「今朝を苦し」と訴えて八一を起こしたのは、未明のことであろうか。

今わの際のか細い声で訴えるきい子の一言を聞いても、空襲警報中で身動きがとれない。この歌には、学門一筋に不器用に世を生きてきた老学者・八一の心の底から突き上げるような悲哀が滲み出ている。若くしてまさに落命せんとする女とそれをただ見守るしかない学匠。如何ともしがたい二者の緊迫したドラマが観音堂をステージとして展開される。

(昭和20年4月14日、東京大空襲のため罹災、秋艸堂は全焼。八一ときい子は疎開先として、北蒲原郡中条町の丹呉康平宅に落ち着く。しかし、きい子の病の結核が開放性へと進んでいて、人への感染を恐れて、同家所有の観音堂へ移り、ここできい子の最期をみる。きい子は21歳より13年間にわたり八一に仕え、33歳で病没した。八一の学芸のために捧げ尽くした命といえようか。それをもっとも感じていたのは八一自身である。この時、八一は64歳。)



2 やまばと の とよもす やど の しづもり に なれ は も  
ゆく か ねむる ごとく に

山鳩の響<sup>とよ</sup>もす宿の静もりに汝はも逝くか眠るごとくに

(注) ○とよもす―鳴り響かせる。他動詞。○しづもり―静まり。

(大意) 「外では山鳩がしきりに鳴いているが観音堂の堂内はかえって静寂で、そのなかでおまえは死にゆくのか、まるで眠るように静かに。」

「おまえはわたしを残してもう逝ってしまうのか」という八一の哀感が溢れ出ているこの歌は、まことに品格が高くて美しい。

連日の看護の疲れからか、しばらく八一がまどろみに落ちた。くぐもる低音でほろろと鳴く山鳩の声は、子守り唄のようにも響く。この微睡の間に、きい子は仰臥のまますでにこときれていた、という。きい子の片方の手は、八一の方に伸ばされていた。

7月10日の八一の日記に、「予も暫時まどろみおるところへ沼垂の人々くる。物音に目さまして見れば仰臥のまますでにこときれてあり。午後四時頃なり」とある。(沼垂の人々とは、高橋イクなどのことで、きい子の親戚にあたる。)

八一ときい子は、丹呉家所有の観音堂へ7月3日に移り住んだ。八幡医師の診断では、きい子の喉頭結核は開放性に進んでおり、丹呉邸の同居の人々に病気が感染することを恐れたためである。当時、結核は死の病として恐れられた。

丹呉邸の農業用のリヤカーに布団を敷いて、きい子とその上に乗り、八一がリヤカーを引いた。八一の日記には、「雨模様なりしをキイ子リヤカーに乗せ、リヤカー七往復にて観音堂へ引越す。日暮れて間にあわず夕食を略す」とある。さらに、「キイ子衰弱加わる。キイ子心得方につき申しきかず」と付言してある。具体的なことは分からないが、きい子の気持を引締める言葉を吐いたのであろう。

3 あひ しれる ひと なき さと に やみ ふして いくひ きき  
けむ やまばと の こゑ

相知れる人なき郷に病み臥して幾日聞きけん山鳩の声

(大意)「きい子は親戚や知己もないこの西条の村里で、不治の病に臥して、幾日も山鳩の声を聞いていたことであろう。」

八一の父方の親戚である丹呉邸に身を寄せたのは、きい子が4月下旬、八一は5月の初めのことであった。この寄留先の丹呉家から挽歌「山鳩」の舞台となる。

きい子は新潟市沼垂の生まれであるので、北蒲原郡中条町西条の地は、はじめて住んだ異郷の村である。したがって、相知れる親戚や知人は一人もいなかった。

7月6日付の八一の日記には、「隣の三浦から胡瓜を貰ひキイ子喜びて食ふ」とある。結核による微熱に悩まされていたきい子には、新鮮な朝もぎ胡瓜はとても美味しかったのであろう。高村光太郎の『智恵子抄』の檸檬<sup>モン</sup>を噛んで、トパーズ色の汁を飛び散らせた智恵子の白い歯を想起する場面である。

親切な三浦作吉と妻・クマは、會津八一の厳しい観音堂時代の生活を物心ともによく支えた。

山鳩の声は、郭公の鳴声のように澄んではない。低く太い声で、聞く人の五臓六腑に響きわたるような声である。来る日も来る日も山鳩の声を聞きながら、きい子は臥せったままで、八一の言葉を反芻したり、自分自身の短い一生を回顧<sup>かいこ</sup>したり、物思いに耽<sup>ふけ</sup>っていたことであろう。八一は、不器用ながら家事をこなし、きい子を残して、買出しや、郵便局に出かけたりして、観音堂を留守にすることもあった。

「山鳩や穂麦がはての森のなか」(八朔郎：明治42年)

「桜桃の枝に登れば聞こえ来る水田のはての山鳩の声」(昭和21年6月)

會津八一が俳句を始めたのは、新潟中学5年生の時で17歳。その句風は、正岡子規によって評価された与謝蕪村の影響がみられる。明治40年4月

には、『新潟新聞』の俳句選者となり「俳句を募る」の記事（同年5月9日）にいわく、「県下の俳壇に會津八朔郎を有するは尚中央散文界の夏目漱石を有するが如し」と。

サクランボの木に登って聞く山鳩の声は、あの観音堂で、死にゆくきい子と共に聞いた山鳩の声とは、似て非なるものである。「年年歳歳花相似たり 歳歳年年人同じからず」で、時の流れは、痛々しい心の傷をも癒してくれる。

明るく晴れた日に、遥かに続く水田の彼方の森の中から山鳩の声が聞こえる。その声は初夏の空に吸い込まれるように爽やかである。俳句では、佐渡島宿根木の森の山鳩の声であり、短歌では中条の森の山鳩の声である。

山鳩は雉鳩と同じ、翼の色は大体雌雉に似て、姿形は均整がとれていて美しい。

翼長19cm。夏には木立の梢に、つがい鳩の姿をよく見かける。英語のピジョン (pigeon) の語源は、鳥の鳴き声の擬音語。デデッポッポーと鳴く。ダヴ (dove) は、ノアの箱舟やオリーブの葉を連想させ、平和、柔和、純潔などの象徴。鳴き声はクークー。

4 やすらぎて しばし いねよ と わが こと の とは の ねむ  
り と なる べき も の か

安らぎて暫しいねよとわが言の永遠の眠りとなるべきものか

(注) ○やすらぎて—穏やかな気持で。○いねよ—寝ねよ。とは—永遠。○ものか— へのはずがないのに。意外なことについての驚きをあらわす連語。

(大意) 『「気持を楽にしてしばらく寝ていなさい」といったわたしの言葉が、永遠の眠りになろうとは。そんな筈はないのに、どうしたことなのだ。』

子が親より先に死ぬことを、仏教では逆縁といい、世の人々はこれを忌み嫌い、歎くのである。八一も心の中で歎いていた。加えて、人は臨終の際、親しい人に見守られ、末期の水を飲ませてもらう、といわれている。

きい子の看病に疲れ果て、八一はしばらくまどろんでいた。その間に、きい子はたった一人で、養父・八一にも気付かれず、静かに、死出の旅路へと発っていったのである。きい子の「末期の眼」に映った風景は、どのようなものであったであろうか。末期の水をとってやれなかったことを八一は長く苦しんだ。「きい子がかawaiiそうだ」という思いは消えない。「心安らかに少し寝なさい」といったわたしの言葉どおりきい子は眠り、その眠りは永遠の眠りとなってしまった。八一の無力感、如何とも名状しがたい気持がある。人は愛が深ければ深いほど、後悔の念や哀悼の情は深いものである。

7月10日の八一日記に「キイ子薏苡仁と牛乳一合と卵半個」とあり、これがきい子がこの世の生を終わる時に摂取した最後の食べ物である。

（「薏苡仁」（よくいにん）の定義は、『広辞苑』によれば、「ハトムギの種子。ひき割って粥（かゆ）・スープ・菓子などに作り、また生薬として利尿・緩下・鎮痛・鎮痙（ちんけい）・消炎などに用いる」とある。）

また、これに続く日記の一部を引用する。「午前八幡の来診を乞い葡萄糖注射後顔面一変し苦悩するにつき安臥せしめ・・・」とある。その日の午前、ホームドクターの診察を受けた。戦乱の世相であり医薬品も不足していたであろう。「医者にも診てもらったからもう大丈夫だ。安心して少し寝なさい」ときい子を寝かせた。

きい子は表情も穏やかになり、眠りについた。少し眠れば楽になるだろう。八一の言葉どおりに眠りについたきい子であったが、その眠りは永遠の眠りとなってしまった。八一も気付かぬうちに、きい子はこの世を去ってしまったのだ。

5 いたづき を ゆきて やはせ と ふるさと の いなだ の か  
ぜ を とめ こし もの を

いたづきを行きてやわせと故郷の稲田の風を求め来しものを

（注）○いたづき一病氣。○やはせ一自注には「やはらぐること」。  
○とめこしものを一尋ねてきたのに。自注には『「とむ」は、尋ねること。  
尋ね来れるものをといふこころなり」とある。

（大意）『「おまえの病の身を行って、養生するように」と故郷の稲の

実る<sup>たんぼ</sup>田圃を渡る<sup>さわ</sup>爽やかな風を<sup>たず</sup>尋ねてきたのに。」

事実は、八一ときい子は、戦禍で家を焼かれて東京を追われるように逃れて、ここに辿り着いた。しかし、この歌では、望んでこの地に来たように詠出されている。

文芸の表現としては、ポエテック・ライセンス (poetic license) 「詩的許容」(文学的効果を高めるため韻律・論理・文法などを破ることが許されること) といって、許容されているものである。昇華された悲哀が映し出されている。

6 やみ ほそる なが て とり もち まがつひ に もえ たつ  
やど を いでし ひ おもほゆ

病み細る汝が手とり持ちまがつひに燃え立つ宿を出でし日思ほゆ

(注) ○まがつひ—いまわしい戦火。また、「禍つひ」の「ひ」は、不幸・災難をおこす神霊、とも解釈できる。「つ」は連体助詞。

(大意) 「病み細ったおまえの手をしっかりと引いて、あのいまわしい戦火で燃え立つわが家を逃れ出た日のことが思い出されることよ。」

「焦土」の題詩には、「四月十三日の夜アメリカ機<sup>せう い だん</sup>の焼夷弾<sup>そう</sup>のもとに草<sup>ろ</sup>廬<sup>まんおく</sup>たちまち焼け落ちて満屋<sup>まんおく</sup>の図書器玩<sup>きぐわん</sup>ことごとく灰燼<sup>くわいじん</sup>となる」とある。

(○草廬—(自分の家を卑下して) 粗末な家。○器玩—収集物など。○灰燼—焼けて原形をどどめない状態。→灰燼に帰する。)

昭和20年4月13日、東京大空襲の戦火に追われて、着の身着のまま、洋傘一本をよろめく老躯の杖として、病気でやせ衰えたきい子の手をしっかりと引いて、火炎地獄のようなわが家を脱出したのであった。

ひともと かきつゑ  
一本の傘杖<sup>かさつゑ</sup>つきて赤き火に燃え立つ宿を逃れけるかも

「焦土」

(注) ○宿—目白文化村の慈樹園秋艸堂。

7 ふみ よむ と ただに こまれる わが いほ に はべりて す  
ぎし ひとよ かなし も

<sup>ふみ</sup>  
書読むとただに籠れるわが庵にはべりて過ぎしひとよ悲しも

(注) ○ただに一単に。○いほ一庵、(自分の家を卑下して) 粗末な家。  
○はべりて一仕えて。○ひとよ一一生。

(大意) 「書物を読むことだけに専念して、粗末な家にひたすら籠っているわたしの身の回りの世話をして、過ぎてしまったおまえの一生を思うと悲しい。」

太平洋戦争という非常時に、時代から離れた学問の人、獨往の学匠に仕え、人並みに人の世の人々にも触れることもなく、若くして一生を終わったきい子に対する万感の思いがこめられている。装飾的でない単純な文体で、一気に直情的に詠出されている。万斛の涙を注いだ死者賛美の歌。

8 うつしよ の ひかり ともしみ わかき ひ を わが やど い  
かに さびし かり けむ

現し世の光ともしみ若き日をわが宿いかに寂しかりけん

(注) ○うつしよ一この世。○ともしみ一乏しいので。「み」は原因・理由を表わす接尾語。

(大意) 「一家団欒のような、世間並みの明るい光の当る部分も少ない、わたしの家では、楽しくあるべきお前のうら若き日々は、どんなに寂しかったことであろう。」

東京の秋艸堂での生活は、きい子の青春であり、またそれが彼女の短い生涯でもあった。秋艸堂に集まる常連の門下生も少なくなかったが、私学の雄と称される早稲田大学の教授と学生という、ある種の権威の勾配があって初めて成り立つ空間であり、両者間に軋轢が生じる気配のあるときには、きい子はいつもクッションの役目を果たした。

人生の伴走者、あるいは同行者としての、きい子との共同生活を回顧す

るとき、八一の心底は、いかんともしがたく不憫で、内心忸怩たる思いにかられるのである。

9 ひとのよ に ひと なき ごとく たかぶれる まづしき われ  
をまもり こし かも

人の世に人なきごとく高ぶれる貧しきわれを守り来しかも

(注) ○ひとのよ一人の世の中。○たかぶる一自惚れが強い。

(大意) 「人間の世の中であって、人がいないかのように自惚れ、高慢に振舞う心の貧しいわたしを、おまえはずっと守って来てくれたのだね。」

會津八一は、明治14年、新潟市の由緒ある料亭の次男に生まれる。中学時代より『万葉集』に親しむ。正岡子規に傾倒し、子規の根岸庵を訪ね、句作に熱中、やがて歌作も始める。子規の印象を八一は、「唯だ刻々人に迫るが如き一種人格の力を深く感じ帰った」(「我が俳諧」)と述べている。35年、東京専門学校(現早稲田大学)に入学。坪内逍遙や小泉八雲に師事した。

八一は、学校では英語・英文学を教え、弁説が得意で、腕力が強かった。自宅では歌を吟じ、書に遊び、小鳥を飼い、園芸に凝り、ギリシャや奈良の美術に没頭する日々で、まさにマルチ人間。「天下の會津八一だ」と豪語する、昨今の日本から消滅した日本男子だ。元祖純粹なる頑固居士。無妻主義者。非社交的人間。「獨往」とは、八一が好んで書いた言葉で、傍若無人、狷介固陋。とにかく気難しい人で、今様の言葉では、「瞬間湯沸器」というか、気に入らなければすぐに怒り出す。弟子に破門を命ずる。周囲とは軋轢を起こす。堂守のきい子は、人知れず涙を払い、齒を食いしばって奔放不羈の八一を守った。

新潟県上越市の出身で、『ぼくらが非情の大河をくだる時』で知られる清水邦夫の戯曲『わたしの夢は舞う一會津八一博士の恋一』では、きい子の上京は、昭和7年5月18日としている。犬養毅が暗殺された3日後という設定。八一の仇名は「電光石火」、なんでも「問答無用」と電光石化のごとくとつぜん怒り出す。この戯曲中では、きい子は下手な俳句を作る。「雲走る、ああ電光石化、雲走る」の一句を詠んだ。

- 10 いくたび の わが いたづき を まもり こし なれ なかりせ  
ば われ あらめ やも

いく度のわがいたづきを守り来し汝なかりせばわれあらめやも

(注) ○いたづき—病氣。○まもりこし—看病してきた。○あらめやも—生きていたであろうか、いやいない。「や」は反語。

(大意) 「わたしの病気を幾度も看病してくれたおまえがいなかったら、わたしは今日生きていないであろう。」

豊原治郎『會津紀伊子抄』は、足でかせいだ労作である。豊原節といわれる絢爛豪華な形容詞を重層的に織り込んで紡ぎだした、その独特の文体は必ずしも読み易くはないが、氏の内に秘めた情熱は、他の追従を許さない。

下記は、「三の章 佳人 會津紀伊子 素描」からの引用である。

「紀伊子は、至上の赤心と至高の忍耐力と至純の敬愛心とを心の奥深く堅持しながら、公人としての八一を“学匠”の座まで高めしめたのであり、同時に、私人としての八一の激しい感情の起伏振幅の安全弁の役割をいのちを賭けてつとめ切ったのである。正に、紀伊子の生涯は壮絶であり、それ故に、崇高であった。だからこそ、公人としての八一は、世間を闊歩して、蹢躅洋洋の信念を高く掲げ、みずから、孤高不羈の精神に燃えて、思うがままの、文字通り、天馬空を馳けて行くように、無限の天を背に負うて大空翔ける一羽の鷺のように、学匠としての活動を展開することを得たのであり、学匠としての榮譽を日本学芸史の上に永久に不滅のものたらしめ得たのである。かくして、私は、紀伊子なくして学匠・會津八一無し、と考えた次第である。」

- 11 いたづき の われ を まもる と かよわ なる なが うつせ  
み を つくしたる らし

いたづきのわれを守るとか弱なる汝がうつせみを尽くしたるらし

(注) ○いたづき—病氣。○かよわなる—弱い。「か」は接頭語。○うつせみ—この世の人。



(大意) 「もともと蒲柳の質であったお前であるが、わたしの看病のために、そのか弱い肉体を使い果たしてしまったらしい。」

昭和14年春、八一は中耳炎になった。持病の糖尿病も悪化して、神経痛の症状にも苦しんだ。3病の併発である。ただでさえ気難しい人だから、ますます手がかかる病人の看病にきい子は夢中になった。秋艸堂主人の病状がやっとおさまると、夏にこんどはきい子が倒れた。看病疲れである。熱がいつまでも下がらず、初冬には入院となった。このとき以来、八一ときい子は、きい子が治ると八一が病み、八一が健康になるときい子が病床に就くという、病気の連鎖がくり返された。近藤富枝『やまばとの声—会津八一と高橋きい子』には、「老いた八一と病身のきい子は、目に見えない細い銀の糸でつながっている。微かなゆれにも、一方は緊張し、心を騒がせずにはいらなかった」と閨秀作家らしく、二人の心の揺らぎを見事に描出している。

閑雅な画人、小杉放庵は「きい子嬢は二十歳で博士の許に来て、十四年間の間、家事万端、接客、秘書の役、あのかんしゃく持ちの主翁に仕へたこと、なみなみの話ではない」と語った。(『石榴抄』)

12 わが ため に ひとよ の ちから つくしたる なが たまの  
を に なかざらめ や も

わがためにひと世の力尽したる汝がたまのをに泣かざらめやも

(注) ○ひとよ——一生。○たまのを——一命。

(大意) 「わたしのために一生の力を出し切って尽くしてくれた、おまえの短い命に、どうして泣かないでおられようか。」

八一は長身は5尺9寸ほどあり、体重は22、3貫もある巨漢であったが、必ずしも健康が優れなかった。しばしば無理をして、旅行や講演にも出かけた。酒豪といわれた彼は、長く糖尿病に苦しめられた。14年春、風邪をこじらせ諸病(中耳炎、神経痛、糖尿病等)を併発して病臥。ちなみに、きい子の身長は5尺1寸あまり、体重は11貫ほどであった。看護のため、彼女には不眠不休の日が続いた。「あの難病を退治してくれた功労者は、

きい子だ」と八一は思った。夏、寝食を忘れての看病疲れのためか、今度はきい子が倒れる。16年、きい子の病氣は結核へと進み、咯血を見る。八一は弟戒三と相談して、19年、きい子を養女とする。東京空襲で秋艸堂を焼かれ、20年4月末、越後・中条の丹呉家に寄留。7月3日、きい子の容態が深刻になる。周囲の人々に伝染の恐れがあり、二人は村はずれの観音堂に移り住む。10日、八一ひとりが看取るなか、きい子永眠。まだ33年と4ヵ月の若さであった。堂守として秋艸堂に来てから13年あまり、ひたすら八一に献身した一生であった。八一が最初に撰んだ戒名は、素月妙影信女。すぐに素月冷光信女と改める。素月妙影は響きがやさしく、素月冷光は寂しすぎるのだが、八一の寂莫たる思いがこの改正の筆をとらせたのであろうか。

人を恃まず孤高を持し、学芸の貧道を歩む自分をおまえはよく守ってくれた、という感謝の念が表れている。

13 ひと みな の はばかり われ に つつま ざる なが この  
は の すがし かりし か

人皆の憚るわれに包まざる汝が言の葉の清しかりしか

(注) ○はばかり—遠慮する。○ことのは—言葉。○すがし—清々しい。

(大意) 「多くの人が恐れ、遠慮しがちで、本当のことを言わないわたしに、包み隠すこと<sup>かく</sup>なく言うべきことは、はっきりと意見するおまえの言葉は、なんとさわやかであったことか。」

八一の隣人として長年にわたって彼を支えた料治熊太は、きい子の口から、婦人雑誌に掲載された小説や評論への手きびしい批判を聞くことがあった、という。「涼やかな眼を輝かせてこの人は、よくもこんなことを言う」と、時々あきれて、その眼を見返すことがあった。先生のそばへ侍っている人だけに、見方もなかなか鋭く、かなり辛辣な批判もされた」と述べている。さらに熊太の筆に従えば、「他人のことで、ひとり憤慨される先生を、涙を湛えて、いさめることの出来る人もキイ子さんだけだった」という。(『会津八一の墨戯』)

14 くみ いでて ひと に すすめし ひとつき の ちや に さへ  
こめし なが ころろ かも

汲み出でて人に勧めしひとつきの茶にさえこめし汝が心かも

(注) ○くみいでて一酒・茶などを器につぐこと。○ひとつき—一杯

(大意) 「(清泉湧く庭の)井戸から汲んでできて、(秋艸堂に來た)お客様にすすめた、一杯のお茶にまで、おまえの愛情はこもっていたのだ。」

「きい子さんが点ててくれる抹茶は、絶品だ。お茶の味を偲んでみると、いつもそこに、優しいきい子の姿が見えてくる。すると、また秋艸堂に行きたくなってくる。」(『石榴抄』)

県立新潟高女の「課外活動」欄には、きい子が茶道部に所属した記録はない。きい子が秋艸堂時代からお世話になった主治医・山本敏晴夫人から、茶道の指南を受けていた。隣人の料治 花ときい子は茶道で同門であり、姉妹弟子の間柄であった。

豊原治郎『會津紀伊子抄』には、昭和59年3月21日に実姉・渡部キヨ夫人と面談した記録が載っている。夫人は、「キイはおとなしく、几帳面な性格の子で、努力一途で、なにごとに対しても誠実にとりくみ、忍耐がよく・・・」と語っている。

結婚適齢期のきい子に、ときに縁談がもたらされることもあった。平成6年7月10日、柴橋庵にて、渡部キヨさんが直話で、「昭和18年ごろ、キイが相談事があるといって、私のところに来て、一晩泊っていったことがありました。結婚話を持ち出すと、先生の機嫌が悪くなるのであきらめる、といって一晩泣いて帰っていきました」と語ってくれた。

この日は、小柳マサ會津八一記念館長が施主となり、五十回忌の法要「冷光忌」がしめやかにとり行われた。場所は中条町の柴橋庵。渡辺貞乗庵主の般若心經のしめやかな読經が参会者の頭上をわたり、小ぶりの堂内からそのまま戸外に流れ出て、蟬しぐれにかき消されていった。

渡辺貞乗庵主こそ「山鳩」序文で、雛尼と呼ばれたその人である。

會津八一に枕經を読むように要請され、雨模様の中、自転車走らせて観音堂へ向かったこと、この世の生を終えたばかりのきい子の印象、着ていた着物の文様、着物の丈が短く両足がよきとでていたので背の高い

人と思ったこと、観音堂の間取り図を広げ、安置されていた庫裡の部屋の様子、憔悴しきった八一の表情のこと等々、半世紀の時空を超えて、リアルにも静かに語るこの尼僧の一言ひとことが参会者に感動を与えた。その時、この雛尼の年齢は20歳であったという。

15 をのこご に うまれたり せば ひたすらに ひとつ の みち  
に すすみたり けむ

<sup>おのこご</sup>  
男子に生まれたりせばひたすらにひとつの道に進みたりけん

(注) ○をのこご—男子。○ひたすら—ひとすじに

(大意) 「もしおまえが男性に生まれていたら、ひたすら学芸の道を拓いて進み、ひとかどの人物になったであろうに。」

早稲田大学は、田中穂積総長の英断により、昭和14年より、他大学に先がけて、女子学生の入学を許可した。男子学生ばかりで殺風景だった八一の教室にも女子学生の姿がちらほら見られるようになった。それは暗い世相を一瞬だけ忘れさせるような、華やかな彩を添える変化でもあったともいえるか。

「しかし、女性に学問は不要といった考えが根強く社会に浸透していた時代だったので、早稲田大学に進学する学生は驚くほどすくなかった。昭和14年には4名、15年は5名、16年に6名、17年に4名という数だった。昭和23年までの卒業生は、全部でわずか34名にすぎない。」(工藤美代子『野の人 會津八一』)

16 あひ しれる わかびと つどひ いつ の ひ か われ を か  
こみて な を ことなさむ

あい知れる若人集ひいつの日かわれを囲みて汝をことなさん

(注) ○なをことなさむ—噂をしよう。自注に、『な』は汝。『ことなす』は、云ひ出でてその噂をなし、語り草にすること」とある。

(大意) 「戦乱の後、世の中が落ち着いたら、おまえを知っている秋艸

堂門下の若い人々が集まって、わたしを囲んで、おまえの思い出を語りあう、偲ぶ会を催すであろう。」

會津八一門下のひとりが書いた小説で、結城信一『石榴抄』がある。秋艸堂に出入りしていた学生たちときい子との心の交流の事情なども織り込まれている。彼らはいずれも、きい子が真心を込めて接待した若者たちである。

17 わが やど に しじに とひ こし わかびと の なす なから  
め や なが たま も みよ

わが宿にしじに訪い来し若人のなすなからめや汝が魂<sup>たま</sup>も見よ

(注) ○しじに一頻繁に。○なすなからめや—何事かを為さないことがあろうか、いや必ずひとかどのことを為すであろう。

(大意) 「わたしの秋艸堂に頻繁に訪ねてきた若い人々が、学芸の分野でどうして立派な仕事をしないでおれようか、いや必ず身を立て名をあげるであろう。彼らの世話をした、おまえの魂もどうかじっと見守っていてほしい。」

八一の門下生研究会「木曜会」の会員として活躍した、鶴田潔『會津八一先生の思い出』によれば、「昭和二十年は先生にとって人生の最悪の年であったと思う。戦災で総てを失なわれ、お見舞いする人も稀な新潟県中条町西条の観音堂で養女紀伊子さんの逝去にあわれたのであった。当時のことを思い起こすと今でも弟子達の胸は締めつけられるような思いである」と記している。また本書は、「現在、学問の弟子達の多くは各大学の教授となり、後進の指導に当たってられる。先生はあの世でお前達も少しはやっているようだね、と笑っておられるかも知れない」と結んでいる。

18 やまばと は き なき とよもす ひねもす を ききて ねむれ  
る ひと も あら なく に

山鳩は来鳴き響<sup>とよ</sup>もすひねもすを聞きて眠れる人もあらなくに

(注) ○きなき—来て鳴く。○ひねもす—朝から晩まで。○あらなくに—(詠嘆を表わして) いないのに。

「き なき とよもす ひねもす を ききて ねむれる」の同音の繰りかえしによる絡むような音調は、くぐもる山鳩の声を思わせる。暗愁が歌びとの心を翳っていく。

(大意) 「山鳩はいつもと変わらず飛んで来て、その鳴き声は、一日じゅう響き渡っている。が、その声を聞いて眠っているきい子ももうこの世の人ではない。彼女の死後も山鳩は鳴き、その哀切な声を聞くと、きい子の面影もちらつくのだ。切実断腸の思いである。」

「山鳩よ、お前はわたしの哀しみを知っているのだろうか。山鳩たちは一日中啼き続け、その声は観音堂を包み林を縫って空に流れていく。病に臥していたきい子は、山鳩の啼く声を守唄のように聞きながら眠り、目覚めてはまたまた聞き入った。」(時任 森『會津八一・娘紀伊子への鎮魂歌』)

19 ひかり なき とこよ の のべ の はて にして なほ か き  
く らむ やまばと の こゑ

光無きとこ世の野辺の果てにしてなおか聞くらん山鳩の声

(注) ○とこよ—黄泉の世界。死者の国。○なほかきくらむ—やはり聞くのだろうか。「か」は(疑問を表わす)助詞で、ここでは文の途中に挿入されているが、現代語では文末にくる。

(大意) 「光の射し込まない<sup>よみ</sup>黄泉の国の野辺の果てで、おまえはやはり今もなお山鳩の鳴声を聞いているのだろうか。」

歌人で八一の弟子である吉野秀雄は、『秋艸道人 會津八一』のなかで、この歌にふれ、「事実、山鳩の声は陰気で、これをあの世からもきいてることだろうかと思わせるに足りるものがある。そして反対に、あの世で鳴く山鳩の声をこの世できているような気持ちにもなってくる。そういふ彼此二世界錯交の心象がこの歌の妙味だといえよう」と鑑賞している。

20 ひとり ゆく よみぢ の つかさ こと とはば  
わが ともがら と のら まし もの を

一人行くよみぢの司こと問わばわが輩<sup>ともがら</sup>とのらましものを

(注) ○よみぢ—冥土へ行く路。○つかさ—役人。ともがら—仲間。  
○ものを — (いえばよい) のになあ。詠嘆をこめて文を結ぶのに用いられる助詞。

(大意) 「黄泉路<sup>よみぢ</sup>をたった一人で行くおまえに、あの世の役人が『おまえはだれか』と尋ねるなら『會津八一の親族です』と答えるといいだろう。」

「若ければ道行き知らじ幣<sup>まい</sup>は為<sup>せ</sup>む黄泉<sup>したえ</sup>の使<sup>つかい</sup>負ひて通らせ」  
(伝・山上憶良)

21 かなしみて いづれば のき の しげりは に たまたま あかき  
せきりう の はな

悲しみて出れば軒の繁り葉にたまたま赤<sup>せきりゆう</sup>き石榴の花

(注) ○せきりう—石榴<sup>ざくろ</sup>。

(大意) 「悲しみにくれて外に出ると、軒近くの繁った葉に交じって、たまたま眼を射たのは、小さな花弁をつけた石榴<sup>ざくろ</sup>の花。何とまあ、あざやかな朱を燃え立たせていることよ。」

朱い石榴の花は、鮮やかな色彩ではあるが、にぎやかで派手な花ではない。むしろ、緑したたる葉の陰影の中に、身を隠そうとしているような控え目な風情がある。八一は嘆きの淵の中に朱を点じて、悲しみの浄化を経た心に救いの灯を求め、自らを慰めようとしたのであろう。

「とくに第四句の『たまたま』のひびきには、涙にあふれる目をしばたいたっているような痛切さがこもっている」と西世古柳平は書いている。(『寒燈集歌解』) これは単なる情景描写ではなくて、石榴の花の発見により、

八一の慟哭がいつそう深まった、と読み取るべきであろう。

挽歌「山鳩」一連の終尾を飾るにふさわしい、心に残る詠嘆の歌である。

「その深紅のものの燃え上るようなものという中でも、石榴の朱はまた格別の趣きがあって、路傍などでこの花を見かけて眼を驚かせるその心持の中には、何か直接な生命の喜びとでもいうようなものが、ともすればふさがちな前後の気持を押しのけて、独特の逼り方で強く胸に逼ってくるのを私は覚える。それは眼を驚かせるというよりも、直接心を驚かせるような色彩である。それは強烈でまた単純でありながら、何か精神的な高貴な性質を帯びた、あの艶やかな朱である。」（中野孝次編『三好達治随筆集』より「石榴の花」）

「石榴はザクロ。ザクロはギリシャ神話で死の果実。死の国でザクロを食べると、もはや、地上に帰ることができない」と會津八一記念館編『會津八一 悠久の五十首』にある。また、「ギリシャ神話でザクロは死に絡んでいる。神話の女神は、ザクロを食べたがゆえに、死の国にとどまることになる。おそらく「せきりう」は、現実すれすれの虚構である」（和泉久子氏執筆担当）ともある。

會津八一門下の高弟・宮川寅雄は、戦時中、右翼思想運動に入った。八一は世に隠れ、地下にもぐってまでその道に生きる男の生きざまを悲しみはしたが、これを捨てよ、とはいわなかった。宮川は「山鳩解題」で、「八一は、罹災前後、みずからも意識しなかったシリアスな現実には包まれて、異質な視座を獲得していったように思うようになった。私は、これを、老熟や諦観で説明しようとしたこともあったが、今はむしろ、會津八一のポエジーの、より若々しい、高次のリアリズムの展開と、考えている」と語っているが、筆者も全く同感である。

### 「観音堂」

観音堂は丹呉家の信仰心の厚かった先祖が、高祖以来の菩提のために約230年前に建立したものである。堂内には百体の観音像が祀られた丹呉家の私寺であった。その敷地は約900坪内外であった。

7月15日付の福田雅之助宛てのきい子死没を知らせる書簡に「養生不相叶去る十日午後死去致し候」とあり、さらに「きい子は自己意識の強く、批評的態度にて一々主張ありて屈せざる風ありしも、忠実熱誠にして正義



の観念強かりしことは認め居り候。」と結んでいる。

戦禍による慈樹園秋艸堂の焼失、それは八一の生涯の寄方であった万卷の書物や数多くの蒐集品の消滅であった。八一は、「猛火といへども、我等の頭の中、胸の底まで焚きつくす能はず」という名句を吐いているが、今、生活の同行者であった最愛の養女きい子を観音堂で失った。八一にとって最大の危機であり、同時にこの逆境からの再出発であった。

「人生の苦渋を濾過し尽くした精神に、移ろいゆく日常が深く、透明に、何の障りもなく、細やかな響きをかなでる。それでいて、人々の心に生をいとおしむ限りない心を育む。そしていつしか浄化されてゆく己の心に思い至る。人生の喜怒を越えた世界が開かれているからであろう。」（『會津八一 人生と芸術』）と歌人・原田 清氏は書いている。この卓抜した意見に筆者も同感である。

「山鳩」の成立の後、観音堂で一人起居し、沈静した心を研ぎだし、老残の孤身への自哀を紡ぎだした「観音堂」と題した10首を詠出した。「山鳩」と違って、嘆きや悲しみが直接的ではなく、日常の生活の情景をさりげなく詠んでいる。

八一という歌人は、人生の寂寥感を潜在的に持っていたのであるが、老齢による孤愁が増し、さらに生活の潤いを与えてくれたきい子の不在感はおおきかった。孤独感に打たれながら、八一は観音堂に百日籠って、読書と写経に明け暮れた。彼は水を汲み、飯を炊き、鍋底の墨を削りとり、薪をも割ったことであろう。嘆きもせずそういう生活を淡々とこなす日々であった。

# 1 くわんおん の だう の いたま に かみ しきて うどん の かび を ひとり ほし をり

観音の堂の板間に紙敷きて饅頭の黴を一人干しおり

（注）「観音堂には、西国三十三番に型どりたる木像を安置し、狭き中庭を隔てて庫裏に通ず。予が住みしはこの庫裏なり。庫裏は別に普門庵の名あるも、一般に観音堂を以って知られたり」と自註にある。

（大意）「観音堂の板の間に一人座って、わたしは黴のはえはじめた饅頭を干しているのだ。」

背中を丸めて、ひとり饅頭を板の間に干している。何でもない日常の情景をさりげなく詠んでいるようであるが、そくそくと読み手の胸を打つ寂しさが伝わってくる。八一の索漠とした暗愁を理解するためには、読み手側の感性の深さも要求されよう。

2 かわはら に もの かき をれば ほし なめし うどん の ひ  
かげ うつろひ に けり

傍らに物書きおれば干し並し饅頭の日影移ろいにけり

(注) ○ほしなめし—干し並べた。○うどんのひかげ—板の間に干しているうどんに射す陽の光。

(大意) 「板の間に干し並べた饅頭の傍らで、物を書いているうちに、時間は流れ、饅頭に射していた陽光もいつのまにか移ってしまった。」

文机に向かって物をかいている。歌を作っているのであろうか。あるいは友人や知己にきい子の逝去の書簡を書き継いでいるのか。ふと気がつくと、饅頭に明るく射していた陽の光は、いつの間にか移ってしまって、夕暮れが迫ってきていた。一人の生活はこのように時が過ぎ、一日が終わるのである。

3 かどがは の いし に おり るて なべぞこ の すみ けづる  
ひ は くれむ と する も

門川の石に下りいて鍋底の墨削る日は暮れんとするも

(注) ○すみ—墨(当時は囲炉裏で、鉄瓶や鍋などを自在鉤に掛け、薪や粗朶などを燃やして煮炊きをした。

(大意) 「門の前を流れる小川の踏石に降り立って鍋底にこびりついた炭を削り落していると、もう今日も暮れようとしている。」

きい子を失った直後の日常が映しだされている。日々の雑事をこなすさりげない歌にも喪失感を必死に耐えようとしている心情が、どの歌にも響

きあってる。

観音堂前の門川は、小さな川である。流れは清く、せせらぎの音は一服の清涼剤でもあったであろう。注意深く踏石の上に腰をかがめて、鍋炭を削る。八一はこれも修行のひとつとして、掬えていたのかもしれない。

4 このごろ の わが くりやべ の つたなさを なれ いづく  
に か み つつ なげかむ

この頃のわが厨辺の拙さを汝いずくにか見つつ嘆かん

(注) ○くりやべー厨辺。○つたなさー老学匠の炊事の下手なこと。

(大意) 「このごろわたしの作る下手な料理を、前はあの世のどこかで見て嘆くことであろう。」

大日本帝国の崩壊と混乱の時代で、もっとも食糧難の時であったから、米や味噌も容易に入手できない。したがって、食事は極めて貧弱であったと推測される。「つたなさ」には、雑炊などの食事の内容の悪さも含まれているようか。

回顧すれば、秋艸堂に入ったきい子は、料理の腕も上げ、当時秋艸堂に出入りする門下生に、時々、手作りの料理を振る舞ったという。とくに彼女の豚カツ料理は絶品であった、と伝えられている。

5 のきした に たちたる くさ の たかだかと はな さき いで  
ぬ ひとり すめれば

軒下に立ちたる草の高々と花咲き出でぬ一人住めれば

(大意) 「観音堂の軒下に生えて延び立った草が、高々と花を咲かせ始めている。きい子は逝き、ひとり暮らをしていると、いつの間にか時は移ろい、庭の手入れもできないままになっている。」

夏草は心のままに茂りけり我庵せむこれのいほりに (良寛)

6 には あれて はえ ひろごれる やまぶき の えだ さし しの  
ぐ はぎ の はなぶさ

庭荒れて生え広ごれる山吹の枝さし凌ぐ萩の花房

(大意)「庭が荒廃して生え広がってしまった山吹の枝々を押し分けて、萩の花房が咲いている。」

繁殖力の強い山吹が、我がもの顔でどんどん庭に生え広がっていく。山吹の背丈よりさらに高々と育った萩の花も咲き出した。周囲が緑の中に、風に揺れ、やさしく手まねきでもするような白い萩の花は印象的な情景である。萩の花は八一の好きな草花のひとつ。

まなじり あめつち  
臍にあ天地青しほととぎす

上記の句は、八一が明治四十年に詠んだ句である。俳号は八朔郎。

観音堂には、山鳩をはじめ、郭公や杜鵑も飛来してきて、啼きしきることもあったことであろう。観音堂の周囲には豊かな森が広がっていた。

7 うゑ おきて ひと は すぎ にし あきはぎ の はなぶさ し  
ろく さき いでに けり

植えおきて人は過ぎにし秋萩の花房白く咲き出でにけり

(注) ○ひと―市島春城の母・市島シゲ(西條丹呉家五代宗平の娘)を指すもので、きい子ではない。自註に「春城翁の母堂も、老後この庵に住みて余生を送られたり。或はそのころ植ゑられしものか」とある。

(大意)「萩を植えて愛でた人は今は亡いが、今年も形見の花房が咲き出した。」

気がつけば季節は秋に移っていった。時の移ろいとともに、哀しみも孤独感も昇華されて、透徹した詩魂が叙情的な作品となって結実した。

8 あき ふかき みだう の のき に すごもる と かや に は  
ね うつ はち の むれ みゆ

秋深きみ堂の軒に巢籠ると萱に羽根打つ蜂の群れ見ゆ

(注) ○すごもる―冬を越すために巢籠りする。○かやにはねうつ―萱  
葺きの屋根に蜂の羽根が触れること

(大意) 「深まってゆく秋の観音堂の軒下に、蜂が巣を作っているよう  
で、茅葺きの屋根に羽を打つ蜂の群れが見える。」

越後の冬の到来は早く厳しい。巢籠りして冬を迎える蜂の群れが、陽光  
を浴びていて、蜂の羽根が透明にきらきら光って見えたのであろうか。歌  
人は心静かに観察している。透徹した情感が溢れている。

9 ひそみ きて た が うつ かね ぞ さよ ふけて ほとけ も  
ゆめ に いり たまふ ころ

ひそみ来て誰が打つ鉦ぞさ夜更けて仏も夢に入り給うころ

(注) ○ひそみきて―一人に知られずひっそりやって来て。○さよふけて  
―夜が更けて。「さ」は接頭語。

(大意) 「人目をはばかりようにひっそりやって来て、お堂で鉦を打つ  
人は誰だろう。夜も更けて、仏も夢をご覧になるころだろう時刻に。素月  
冷光信女のきい子もまた。」

この鉦を鳴らしたのは、おそらく軍役にとられた息子の無事を祈って、  
観音堂に万度詣、あるいは百度詣に來た母親が鳴らしたものであろう。平  
成4年の夏、筆者が観音堂跡を訪ねた際、そこでとある初老の人と邂逅した。  
彼は、「ひそみきたのは、うちの母親に間違いありません」と自信をもっ  
て語ってくれた。

この一首には、「仏は常にいませども、<sup>327</sup>現ならぬぞあはれなる、人の音  
せぬ暁に、ほのかに夢に見え給ふ」(『梁塵秘抄』)と響きあうものがある。

10 うらには の しげき が もと の あらぐさ に こぼるる ひ  
 かげ み つつ かなし も

裏庭の繁木が下の荒草にこぼるる日影見つつ悲しも

(注) ○しげき—繁木。○あらぐさ—荒地に生える草、雑草。

(大意) 「裏庭の茂った木の下に雑草に、日の光が落ちているのを見ては悲しい思いを新たにしている。」

「観音堂」の一連10首は、「山鳩」の一連とはやや異なる抒情であり、日常生活の中での人間存在の大本から湧き出る孤愁が描出されている。

おわりに

きい子の病没後、會津八一の窮状を見かねて、丹呉家では毎日のように本邸に戻るようにすすめたが、それにはすぐには応ぜず、その後100余日を観音堂に独り籠って服喪静思の日々を送った。きい子の没後6日目に、西谷啓治宛に「ことに老境に入りたるに着物も家も家庭もなく、悄然たる孤影を親戚に寄せ、わづかに日を送り候こと夢の如くに候」と書き送っている。このような過酷な境遇にあっても、八一は悲嘆を悲嘆としてしっかり受けとめ、窮乏生活より逃れようとせず、むしろその悲傷の中で、自ら求めて心を研ぎだし、独居して静思し、歌想を練ったと思われる。「きい子の死亡と観音堂の窮乏なる生活ありてこそ稍々すぐれた歌を作るほどの心境に進んだものである」と告白しているのもなるほどと納得できるのである。

丹呉協平「會津八一の歌『山鳩』の中の一首に関連して思い出されること」というエッセイによれば、7月20日頃、夕靄の彼方に観音堂前を徘徊する人影を見た。「庫裡での寂寥にたえられず夕暮れのなかに出られ、ただ茫然と徘徊されていたのであろう」と書いている。

数日後、八一は協平に、『鹿鳴集』の中、「印象」の第3番目、秋日の歌を贈っている。書簡用の巻紙に墨書したものである。

いりひさすきびのうらはをひるがへし かぜこそわたれゆくひともなし

昭和乙酉八月一日

秋艸道人

八一の歌の典故となった「秋日」は、『唐詩選』に収載されている耿漳の五言絶句であるが、この一首は、日本人の琴線にふれるところがあって、長く愛誦されてきた。

松尾芭蕉はこの漢詩を典故として、次の二句を作ったといわれている。それぞれの句が耿漳の詩境と共鳴しあっている。

此道や行人なしに秋の暮  
あかあかと日は難面もあきの風

芭蕉は、元禄元年4月11日（推定）に唐招提寺の鑑真和上坐像を拝して、次ぎの一句を詠んでいる。天平時代の制作といわれるこの坐像に接するすべての人々の思いを集約した名吟である。

若葉して御目の掣ぬぐはばや

この句の前書に「唐招提寺鑑真和上来朝の時、船中七十余度の難をしのぎ給ひ、御目のうち潮風吹き入りて、終に御目盲ひさせ給ふ尊像を拝して」とある。

八一は、両眼を盲いられ、瞑目された、慈悲と強い意志を内にたたえたこの鑑真坐像を拝して、下記の一首を詠んでいる。唐招提寺はじめ奈良の寺々は、明治初期の廃仏毀釈の影響下で衰退疲弊していた。この歌には、八一自身の深い嘆きが織り込まれている。

とこしへにねむりておはせおほてらのいまのすがたにうちなかむよは

永久に眠りておわせ大寺の今の姿にうち泣かんよは

「俳句と和歌は似て非なるもの」であるからして、芭蕉の句と八一の短歌を比較考量して甲乙をつけるようなことをするつもりはないが、八一はやさしく自らの想いを吐露していることのみを言及しておきたい。芭蕉と違って、八一は、坐像が御目を閉じられておられるので、そのお姿を眠っているとして、ずっとそのまま御目をつむったままでいてください、今の時代のこの寺の荒廃と仏教のあり様を見てお嘆きになられますよりは、というのである。八一はやさしく、いみじくも自分の思いや嘆きをこの坐像に語りかけている。

上記の丹呉協平に贈った「入日さす黍の末葉をひるがえし風こそ渡れ行く人もなし」に関しても、八一は養女を、協平は幼女を、同じく子供を同時期に死なせた心境を伝えたかったのであろうか。何と美しく、また悲しい心境であろうか。

八一ほど破天荒なエピソードに彩られた人生を送った人は珍しい。「世間を闊歩して、蹣跚洋洋の信念を高く掲げ、みずから、孤高不羈の精神に燃えて、思うがままの、文字通り、天馬空を馳けて行くように、無限の天を背に負うて大空翔ける一羽の鷺のように、学匠としての活動を展開することを得たのであり」とは豊原治郎氏の独特な筆の運びであるが、歌び人として、書家として、学者として、八一の栄光の影には、きい子や丹呉家の大きな貢献があったことを忘れてはならない。絶唱「山鳩」は、伝説となり、やがて神話となるまで、人口に膾炙されていくものと信じ疑わない。

（「山鳩の会」代表）



## 會津八一 略年譜

和歴	西暦	月	事 項	年齢
明治14	1881	8	新潟市古町5番町にて誕生。（會津家は料亭 湾月楼を営む）〔1日〕	
明治20	1887	4	新潟市西堀小学校に入学。	6
明治28	1895	4	新潟県尋常中学校（現・県立新潟高校）に入 学。	14
明治32	1899	8	新潟市内にて、坪内逍遙の講演を聞き、感動 する。良寛の歌を愛読。	18
明治33	1900	6	根岸に正岡子規を訪う。（M32年頃から「ほ ととぎす」に俳句を投稿す）	19
明治35	1902	4	東京専門学校（現・早稲田大学）高等予科に 入学・英文学専攻。	21
明治37	1904	4	早稲田大学にラフガディオ・ハーン（小泉八 雲）を招き、英文学史を学ぶ。	23
明治39	1906	7 9	早稲田大学卒業、卒論は「キーツの研究」。 新潟県・有恒学舎の英語教師となる。	25
明治41	1908	2 8 9	新井町小出雲の入村家で、小林一茶の「六番 日記」を発見す。 はじめて奈良地方へ旅行、「西遊咏 <sup>さいゆうえいそう</sup> 艸」二十 首を詠む。 新潟大火のため、生家會津家罹災す。酒量多 くなり健康を害す。	27
明治43	1910	9	有恒学舎を辞任し、早稲田中学の英語教師と なる。	29
大正 2	1913	10	早稲田大学英文科講師を兼任する。	32
大正 7	1918	3	早稲田中学校の教頭となる。	37
大正 9	1920	9	日本希臘学会を設立する。	39
大正11	1922	8	下落合の市島春城の別荘に移り、秋艸堂と号す。	41
大正12	1923		奈良美術研究会を設立する。	42
大正13	1924	12	『南京新唱』（春陽堂刊）を出版する。	43
大正15 ・昭和元	1926	4	早稲田大学文学部講師となり、東洋美術史の 講座を担当する。	45
昭和 5	1930	1	早稲田大学東洋美術史学会を設立する。	49
昭和 6	1931	2	早稲田大学文学部教授となる。	50

昭和 8	1933	3	高橋きい子「秋艸堂」の堂守となる。	52
昭和 9	1934	4	私家版歌集『村莊雜事』を刊行。7月、文学博士の学位を受く。	53
昭和10	1935	7	下落合、通称目白文化村に転居。齋号を滋樹園と称す。坪内逍遙没す。(77歳)	54
昭和15	1940	5	『鹿鳴集』(創元社)を出版する。	59
昭和17	1942	10	『渾斎隨筆』(創元社)を出版する。	61
昭和19	1944	2	高橋きい子を養女とする。	63
		9	『山光集』(養徳社)を出版する。	
昭和20	1945	4	米軍機の爆撃により罹災、新潟に難を避ける。早稲田大学教授を辞任す。	64
		7	高橋きい子「観音堂」にて没す。(33歳)	
昭和22	1947	4	『寒燈集』(四季書房)を出版する。	66
昭和23	1948	5	早稲田大学名誉教授となる。會津博士記念東洋美術陳列室を開室。	67
昭和26	1951	3	『會津八一全歌集』(中央公論社)を出版。	70
		5	『會津八一全歌集』により読売文学賞を受賞。	
昭和28	1953	10	『自註鹿鳴集』(新潮社)を出版する。	72
昭和29	1954	8	『春日野』(文藝春秋新社)を出版する。	73
昭和31	1956	11	新潟大学付属病院にて逝去。冠動脈硬化症。〔21日〕	75

## 高橋きい子 略年譜

和歴	西暦	月	事 項	年齢
明治45 ・大正元	1912	3	新潟県中蒲原郡沼垂町大字沼垂1888番戸にて生まれる。	
		7	戸籍原本では、キイ(六女)〔31日(日)〕 ＜明治天皇崩御。大正と改元＞	
大正 3	1914		母・ミナ死去(42歳) ＜第一次世界大戦始まる＞	2
大正 6	1917		父・喜蔵死去(51歳)	5
大正 7	1918	4	沼垂小学校入学(保護者は長女の高橋キミ) (1年～4年生まで在籍、5～6年生は、 万代尋常小学校へ転校する。) ＜第一次世界大戦終わる＞	6

大正13	1924	3 4	万代尋常小学校を首席で卒業。(第2回生) 新潟県立新潟高等女学校入学	12
大正15 ・昭和元	1926	12	<大正天皇崩御。昭和と改元>	14
昭和 3	1928	3	新潟県立新潟高等女学校卒業。(第26回生)	16
昭和 8	1933	3	3月末、沼垂駅から夜行列車にて上京し、東京都淀橋区下落合の「秋艸堂」に入る。 以後、堂守として13年余にわたって学匠・會津八一(秋艸道人)に仕える。家事万端をみて、内助の功多かりし。	21
昭和10	1935		東京都淀橋区下落合三丁目の通称目白文化村に転居。齋号を滋樹園という。	23
昭和16	1941	12	夏、病臥中に咯血。 <太平洋戦争勃発。〔8日〕>	29
昭和17	1942	8	信州戸倉温泉千曲館にて、約1か月転地療養する。	30
昭和18	1943	3	新潟市上木戸470の高橋戒三邸にて、約1か月転地療養する。	31
昭和19	1944	2	會津八一との養子縁組成立する。〔1日〕	32
昭和20	1945	4  7  8	アメリカ軍の東京大爆撃のため罹災、「秋艸堂」全焼する。〔14日〕 疎開、新潟県北蒲原郡中条町西条の丹呉康平邸に寄寓する。〔30日〕 きい子の病状が悪化し、感染を恐れ、八一とともに観音堂(「普門庵」)へ移る。〔3日〕 観音堂にて病没。〔10日(火)〕 (きい子絶筆「生活日記」が残された。丹呉邸に寄寓中、昭和20年6月14日から観音堂に移り住んで逝去する3日前の7月7日まで、24日間の身辺諸事が綴られている。) 會津八一、きい子挽歌『山鳩』完成〔上旬〕	33

## MOUNTAIN DOVES

### Preface

Kiiko, whose family name was formerly Takahashi, came to my house when she was twenty years old. Much later she became my adopted daughter. Managing the household of a poor scholar and doing the cooking and other family chores by herself were quite difficult tasks, but somehow she endured for fourteen years. Everyone who frequented my house during those many years recognized how much her support enabled me to concentrate on my studies. Her health was delicate from the very first, yet during those many times when I myself was seriously ill, she tended me until she succumbed at last to fatigue. This spring she lay ill in bed. All of a sudden one night, my house was destroyed by fire in an air raid and we barely escaped death. Together we fled back to Echigo (now Niigata Prefecture) where we found shelter in Nishijō Village (now Tainai City) with the Tango family. Yet it was not long before Kiiko's illness advanced unimpeded, so I left the Tango home and with Kiiko moved into the Kannondō Temple at the edge of the village. It was at this temple that one of the Tango ancestors became a bonze and spent the remaining years of his life. Though it still retained traces of the tasteful and refined structure that it had been at the time of its construction, after generations of neglect, its windows were blocked by overgrown bushes and weeds, with pale tombstones visible in the shadows of the oppressive trees and plants surrounding it. While it may have looked quite desolate, we moved here in order to appreciate the tranquility of nature and to isolate ourselves from human affairs.

With Japan in a state of turmoil, I couldn't ask anyone to support me, and with food and medicine in short supply, I did all that I could in my inadequate and clumsy way to nurse Kiiko and even to cook for her. But at long last, in the full light of day on the tenth of July, she slept her final sleep.

Kiiko usually liked the arts and sciences, but she hated injustice and impurity. Even at the very last stages of her life, she persisted and never lost her clear and pure vision. During this crucial period, transportation facilities were so unreliable that few of Kiiko's relatives and acquaintances could

come to her bedside to show their sympathy. I alone remained by her deathbed, and when I thought of the ultimate loneliness in her innermost heart, I couldn't prevent my tears from falling frequently.

Finally with the help of neighbors, we carried Kiiko's lifeless body to the outdoor crematorium where it was reduced to ashes. The following morning I went alone to the site, gathered her bones, and returned. Since the priest of the village temple had been called to military service, I had no other recourse than to ask a fledgling nun from a nearby village to come to perform the funeral service. She couldn't have been a little more than ten years old. She barely recited one chapter from the *Shushōgi*, spelling out each word, and then left at once.

Thereupon I selected Kiiko's posthumous Buddhist name and conferred it on her: *Sogetsureikoshinnyo*. My family graveyard is in Zuikōji Temple on Nishibori Street, Niigata City, but the city is now in a state of tumult and fearful that at any moment it will be bombed. I will wait for some future time when peace is restored, then carry Kiiko's ashes and place them in my family's tomb. Already I am aging, and the conclusion of the war is as yet unknown. All I can do now is set down this preface to my series of *tanka*.

August 10, Showa 20 (1945)

- 1   How faint your voice,  
      When you said, "It hurts so much this morning,"  
      And to these words,  
      Not a single response could I give.
  
- 2   In the stillness of this temple,  
      Echoing with the calls of mountain doves;  
      Are you so soon about to pass away  
      As if falling to asleep?

- 3 In this unfamiliar village  
Where no acquaintances of yours dwell,  
How many days ill in bed  
Have you heard these calls of mountain doves?
- 4 "For a while," I said, "rest quietly" —  
Oh, how can that this sleep  
Were an eternal one,  
Everlasting.
- 5 To alleviate your illness  
Didn't I take you to your native province,  
Where the bracing winds blow  
Through the rice paddies?
- 6 I clasp your hand,  
Made gaunt by illness,  
I can't forget how we fled our burning house  
During that wartime fire bombing!
- 7 You spent your days  
Waiting on me, serving me,  
I who shut myself up studying in my house —  
Your life was steeped in sadness!

- 8    How lonely it was to reside  
      In my house  
      During your youthful days,  
      Where the light of the real was so scant!
- 9    You well protected this me,  
      who was so proud  
      As if no one else existed  
      In the world!
- 10   How often when I was ill in bed  
      Did you look after me with care —  
      Had you not been with me,  
      No longer would I have been in this world.
- 11   This invalid me  
      You tended with care;  
      And still, your limited energy in your delicate frame,  
      All exhauste and used up.
- 12   My tears cannot help but fall,  
      When I think of  
      The brief, brief life of yours  
      You devoted to me.

- 13 How all of them feared me,  
Spoke out of deference to me,  
And yet how candid your words to me,  
How refreshing, how stirring!

14 In the way you drew water from a well  
And served even a single cup of tea,  
Your entire spirit, entire mind,  
Was given to the task.

- 15 Had you been born a male,  
You might have devoted  
All your energies  
To carving out a path only for yourself.

16 Someday when the young people  
Who knew you  
Gather round me;  
It will be of you they speak.

- 17 When these young people  
Who so often came to my house  
Surely pass on to greater things,  
Let your soul observe them.



- 18 Mountain doves still come and sing  
All day long;  
Even though the one who fell asleep hearing them  
Is no longer in this world.
- 19 Even at the distant end  
Of fields in the other-world  
Where there is no light,  
You can hear the songs of these mountain doves.
- 20 As you travel alone  
In that dark world beyond death,  
I trust you will say that you were a comrade of mine,  
If a guardian of the other-world asks.
- 21 In my grief I left the temple,  
And by chance under its eaves  
Thick with foliage  
I found the red blooms of the pomegranate.

## Kannondō Temple

- 1 Spreading sheets of paper  
On the wooden floor of Kannondō temple —  
I do it alone now trying to dry the mould  
Off the *udon* noodles.
  
- 2 Absorbed in writing  
Beside the *udon* noodles  
Drying in rows on the temple floor,  
And yet how the sunlight shifts to shadow upon them.
  
- 3 I go down and squat on a stone  
Before the stream by the temple gate,  
I scrape soot from the bottom of a pan  
With the day crawling to its close.
  
- 4 Should you look down from somewhere in heaven,  
How you would grieve to see  
Clumsy hands cooking for myself  
These days in the kitchen.
  
- 5 Under these eaves where overgrown weeds  
Stand at a remarkable height  
And begin to flower —  
Here now I am living now alone.

- 6 The garden has been neglected,  
The green stems of the *yamabuki* rose plants  
Spreading tall like overgrown branches,  
White lespedeza flowering above tangled vines.
- 7 Already the autumn lespedeza  
Are blooming white,  
Although the one who planted them  
Has long been gone from this world.
- 8 Late in autumn,  
From the hives in the temple eaves,  
A circle of bees is seen  
Beating their wings against the thatch.
- 9 Who was it  
That came in secretly late at night  
To strike the altar bell  
At a time when even the Buddha himself lies dreaming?
- 10 This sadness I feel  
When behind the temple  
And beneath the trees thick with leaves —  
I see the sun's rays scattering over the wild weeds.

***Gakki* (Principles for Study) 學規**

- 1 Love life profoundly.
- 2 Know yourself and reflect on that.
- 3 Cultivate your character by studying the arts and sciences.
- 4 Each day immerse yourself in new aspects of life.

# 〈参考文献〉

- 秋艸道人 『山鳩』 (中央公論美術出版、1971)  
 和泉久子 「山鳩試論—その成立について—」 (『鶴見大学紀要』1974.2)  
 喜多 上 「山鳩攷—會津八一の挽歌の発想—」 (『銅鑼』41、1983)  
 喜多 上 「會津八一とラスキン」 (『銅鑼』57、2008.12)  
 料冶 花 「會津八一に仕えた三人の女性」 (『隨筆サンケイ』1957.3)  
 清水邦夫 『わたしの夢は舞う—會津八一博士の恋』 (演劇雑誌『テアトロ』1996.5)  
 近藤富枝 『山鳩—知られざる會津八一の恋』 (『別冊婦人公論』1980.夏号)  
 小笠原忠 『鳩—教育者會津八一の人間像』 (アポロン社、1970)  
 継志会編 『秋艸道人を語る』 (継志会、1979)  
 吉池 進 『會津八一傳』 (會津八一先生伝刊行会、1963)  
 安藤更生 『書豪 會津八一』 (二玄社、1965)  
 料冶熊太 『會津八一の墨戯』 (アポロン社、1969)  
 宮川寅雄 「山鳩」 解題 (中央公論美術出版、1971)  
 結城信一 『石榴抄—小説秋艸道人断章』 (新潮社、1981)  
 西世古柳平 『寒燈集歌解』 (中央公論美術出版、1983)  
 上村占魚 『會津八一俳句私解』 (中央公論美術出版、1983)  
 植田重雄 『秋艸道人・會津八一の生涯』 (恒文社、1988)  
 吉野秀雄 『秋艸道人 會津八一』 上・下巻 (春秋社、1993)  
 時任 森 『會津八一・娘紀伊子への鎮魂歌』 (青娥書房、1996)  
 豊原治郎 『八一と山鳩 會津紀伊子抄』 (中央公論、1998)  
 工藤美代子 『野の人 會津八一』 (恒文社、2000)  
 原田 清 『會津八一 寒燈集評釈』 (東京堂書店、2001)  
 出来成訓 『日本英語教育史考』 (東京法令出版、1994)  
 『敬和学園大学研究紀要』 第四号 (1995.2) pp.189-212. 等々